

あとがき

本書の各論文は、河合文化教育研究所の主催する研究会の一つである「内藤湖南研究会」に参加しているメンバーによって書かれたものである。この研究会は、発足以来四年余り経っているのだが、各論文は、この四年にわたる各参加者の研究成果の中間報告とでもいうべき性格を持っている。あえて「中間報告」と呼ばなければならぬのは、私たち研究会のメンバーが、四年もの「長い」歳月が経過しているにもかかわらず、湖南についてのくつきりとした全体像を今もなおつかみきれていないという正直な思いの表明であるのだが、そうした消極的な意味だけではなく、湖南の全体像を求めて今後も湖南研究を持続していきたいという積極的な意思の表明でもある。湖南研究を持続させていくためにも、各自が基礎的なステップを踏み固め、それによって次の段階に向かう足がかりとしたい、そんな気持から本書は企図されたのである。

各論文には、執筆者たちの湖南に対する様々な思い入れや、異なった切り口、多様な問題意識が顔をのぞかせているはずである。そして当然のことながら、湖南の全体像が容易には掴み得ないことへの苛立ちや戸惑い、それゆえの混乱や矛盾も内包されていることだろう。また、各論文がそれぞれ独立した論考になっていて、湖南に向き合う共通の視座・視点が形成されていないために、本書を読み進めていけばいくほど読者の湖南についてのイメージが拡散してしまうかもしれないというおそれなしとしない。

私たちは決して同一かつ唯一の湖南像を作り上げるために研究会を持続させてきたわけではないのだが、しかしそれでも、湖南についての共有しうる理解を参加メンバーの中に拡大していくことを一つの課題にしてきたことは確かである。事実、研究会の持続の中でほんやりとした形であれ湖南像についての共有部分が徐々に形成されつつあるのだが、にもかかわらずそれが本書では必ずしも十分には表現されていないのである。「研究」「表現」においてなお「未成」と言わざるを得ない。これも「中間報告」という本書の性格に由来するものとご寛恕願いたい。

しかし、まずは「内藤湖南研究会」について説明しておかなければならない。この研究会は、河合文化教育研究所の主任研究員である谷川道雄氏の呼びかけによって始められたものである。一九九六年十月十八日に第一回の研究会が京都で開催され、以後ほぼ月一回のペースで今に至るまで（二〇〇〇年十二月の時点）三十九回の研究会が開かれてきた。この過程で参加メンバーには若干の変動があったが、今では中国史研究者、大学院生、高校・予備校の講師など合わせて十数名がレギュラー・メンバーとして参加している。

この会の運営は、毎回レポーターを決めて読書会形式で内藤湖南の著作を読み進めていくというきわめてシンプルなスタイルをとり、レポートそして自由討論、最後は飲み屋での雑談に行き着くという肩肘張らない自由闊達な雰囲気自然に生み出されてきた。そして、そうしたある意味では気楽な雰囲気によって、湖南という難解

でとりつきにくい対象と持続してつきあっていく意欲が支えられてきたように思われる。

最初に私たちの研究会で取り上げられた湖南の著作は『支那論』であり、次いで『新支那論』が取り上げられた。『支那論』は、辛亥革命という近代中国の政治的動乱に対する湖南の現状分析と展望が述べられたものであり、『新支那論』は、『支那論』から十年を経た時点で再び湖南が中国の「現実」と日本の役割に言及したものであり、いずれも湖南の時事論、「現代」中国論、「現代」日本論といつてよい内容が扱われている著作であるが、こうした湖南の時事論的な著作を研究会の出発点に据えたこと自体に、この私たちの「湖南研究会」の性格が象徴されているように思われる。『支那論』『新支那論』から始まり『日本文化史研究』……そして二〇〇〇年一月には『清朝史通論』と様々な湖南の著作を読み継いできたわけだが、振り返ってみればこの四年余りの間私たちが侃々諤々議論し合ってきたことは、結局のところこの『支那論』『新支那論』をどう理解するかという点に帰着していく。そして当然のことながら、湖南が「今」をどう位置づけたのかという問いかけは、そのまま私たちが「今」をどうとらえるのかという問題に接続していく。私たちの「今」につながるような形で湖南の「今」を把握できないだろうかという問題意識が、漠然とではあれ、メンバーに共有されていたように思われるのである。

内藤湖南は、近代日本における東洋学（中国学）の始祖ともいえる存在である。その広く且つ深い学識には驚嘆せざるを得ない。それを謙虚に学び取っていくこと自体、意味深い作業であろう。しかし、私たちが谷川氏の呼びかけについふらふらと引き寄せられるような形でこの研究会に集まったのは、偉大な湖南の学識のほんの一端でも学び取りたいなどと言うような殊勝な心がけからでは決してなかった。私たちが自然な形で湖南に引き寄せられていったのは、私たちの「今」が醸し出している「不安」に突き動かされたことではなかったか、と思われる。「今」は、大仰な表現を借りて言えば、歴史的なアイデンティティの確認しにくい時代ということになるだろう。「今」「ここ」そして「あそこ」へという座標軸そのものが成立していないのである。もちろん、巨大な

「今」は、確認できる。高度科学技術文明、情報化社会、超資本主義社会など……。しかし、私たちが足場にしよう「ここ」そして向かいゆくべき「あそこ」を確認できるだろうか。足場のない宙に浮いたような不安定な位置を確認せざるを得ない。こうした茫漠とした不安を抱えもつ私たちにとっては、湖南が「今」を分析しつつ浮かび上がらせている歴史意識、骨太い歴史観は、ひよっとして私たち自身の足場を照らしてくれるかもしれないという意味できわめて魅惑的なのである。

もちろん、湖南の見た「今」と私たちの「今」は同じではない。それに湖南は安易に寄りかかりうる対象ではない。しかし、湖南の「今」と私たちの「今」の違いを明確にすることでさえ、私たちの「今」を幾分かは分明にしてくれるであろうし、また、湖南の歴史観の肌触りを確認するだけでも私たちの「今」を照らす微かな光になるだろうと、私たちは確信している。この確信に支えられながらこの研究会をこれからも持続させていきたいと私たちは考えている。ただ、本書の各論文がどれだけの光になり得ているか否かは、自ずから別の問題である。読者諸氏の忌憚ない批判を期待したい。

なお、本書を出版するために、河合文化教育研究所の事務局の方々には多大の労力を割いていただいた。とりわけ加藤万里さんには、本書の構成、内容にわたって様々な有益な助言を頂いただけではなく、校正の労も一手に引き受けていただいた。あつく御礼を申し上げます。

二〇〇一年 一月

山田 伸吾